



Title	日常生活の援助技術評価方法の検討
Author(s)	川合, 育子; 岩本, 幹子; 清水, 実重 他
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 10, 7-17
Issue Date	1997-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37619
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_7-18.pdf



原 著

日常生活の援助技術評価方法の検討

川合 育子・岩本 幹子・清水 実重・飯澤 麻・宮島 直子

The Validity of Fundamental Nursing Skills Test for Students

Ikuko Kawai, Mikiko Iwamoto, Mie Shimizu, Asa Iizawa and Naoko Miyajima

Abstract

We tried a new test method which was fundamental nursing skills for daily life activities in 1996. The purpose of this study was to assess the validity of nursing skills testing and nursing students' traits to master skills. Subjects were 79 nursing students who were 1st year Hokkaido University College of Medical Technology students. We tested 9 kinds of nursing skills using original check lists. Four faculty members evaluated nursing students. Check lists were analyzed by categories of the Construction of nursing skills for daily life activities (Enokida et.al. 1993). As a result, check lists were valid because items of check lists implied "the core of nursing skill". But, on the other hand, there were some "common essential factors of nursing skills" lacking in the check lists. We analyzed the score of nursing skills test statistically. There were significant differences among scores by the four faculty members, so we recognized the importance of agreement among them. The highest average score of nursing skills testing was "bed making", while "shampoo" was the lowest. As compared to other skills, "shampoo" was a complicated skill to students. Nursing students had difficulty mastering "body mechanics" skills although they followed a manual in an easy order.

Key Words: Fundamental nursing skills, Nursing skills test, Check lists

要 約

平成8年度基礎看護技術Ⅱの実技テストは、独自に作成した評価表、限定したテスト時間、複数の教師による評価など、いくつかの試みを行った。本研究の目的は、今回試みた日常生活

に対する援助技術の評価方法の妥当性を明らかにすること、学生の学習特性を抽出することである。その結果、1. 評価表は各「共通不可欠要素」と「技術の核となる要素」がほぼ含まれ、その割合は4:6とほぼ妥当な構成であった。2. 複数評価者間の得点差は統一見解を得られ

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

るよう調整した「技術の核となる要素」に認めず各人の裁量に任された「共通不可欠要素」に認めた。3. 学生の学習特性として、練習で上達しやすい「ベッドメイキング」の得点が高く、技術が複雑で練習しにくい「洗髪」の得点は低いことが明らかとなった。また、基礎看護技術を行う上で、体験を積み重ねることで確実に修得しなければならない「ボディーメカニクス」が弱いことも明らかになった。

キーワード：基礎看護技術、実技テスト、評価表

1. はじめに

専門職者の看護行為は、理論に裏付けられた技術を発揮することによって成立する。保健師助産婦看護婦法により「療養上の世話」「診療の補助」を業とする看護婦にとって、基礎看護技術は専門職者としての看護を実践するための最も基盤となる技術である。氏家¹⁾は「看護は対象者が正常な日常生活を安全に営めるように援助することであり、その援助は対象者が自分でできない部分を補うとともに、可能な限り自立できるように手助けすることである。」と述べ、多くの看護理論家達も日常生活の援助の重要性を強調してきた。基礎看護教育における基礎看護技術の授業では、日常生活の援助技術が大きな比重を占め、この技術は「基礎看護技術Ⅱ」として1学年で修得する。学生は講義、学内実習により学習した後、一定のレベル達成について評価を受ける。多くの教育機関と同様に当学科でも、限られた教員、実習の場、時間内ですべての学生に一定のレベルの看護技術を修得させるために多大な努力を要している。本研究は、日常生活の援助技術の教育プロセスのうち、限定時間内に多種の技術評価を可能にするために、いくつか試みた評価方法に焦点をあてた。日常生活の援助技術の実技テストの結果から、より適切な評価方法を探究するとともに、学生

の学習特性を明らかにした。

2. 研究目的

- 1) 日常生活の援助技術の評価方法（実技テスト運営と評価表）が、行動判定方法として妥当であったかを明らかにする。
- 2) 実技テスト結果の分析から学生の学習特性を抽出する。

3. 平成8年度基礎看護技術Ⅱの実技テストの運営

テスト期間は、平成9年2月20, 21, 24日の3日間である。テスト項目は9種目とし、前期分1種目、後期分1種目を1人の学生に割り当てた。学生には事前に出題項目と各種目の評価表を提示した。テスト2日前に各学生にテスト種目、日時、場所、評価担当教師を割り当てた。（出題項目内容・患者の条件は表1）。

テスト当日、学生はスケジュールにそって、試験場に入室しテストを受け、他の学生は自習していた。テスト時間は1種目15分で準備完了から開始し、出題内容を実践した段階で終了、後始末時間は含めなかった。テストは原則として一人で実践し、患者役は学生が行い、協力者役の学生は、試験を受ける学生の指示を受けながら、主に準備や後始末を手伝った。

テストは4名の教師が分担して直接観察法を用い単独で行った。それぞれの教師の教育経験年数、臨床経験年数はA27年、4年、B7年、6年、C2年、11年、D2年、6年であった。なお、それぞれの教師が学内実習時に担当していた学生を、同じ教師が評価しないこと、2回のテストを担当する教師は違えるように配慮した。

評価表は看護技術の原理原則を念頭に、文献・資料を参考にして作成した（表2）。評価表の項目は準備状況を3項目、操作状況を7項目、完成状況を3項目、看護者の態度を3項目と統一した。評定段階はAが「たいへんよくできた」、Bが「よくできた」、Cが「できたが不十分」、

表1 出題項目内容と患者の条件

	出 題 項 目	患 者 の 条 件
前期 の 項 目	1. ベッドメイキング オープンベッドを一人で作成してください。	防水シーツを必要とする。
	2. リネン交換 臥床患者がいるベッドの敷シーツと横シーツと枕カバーを交換してください。	自力で動けず、起座ができない。
	3. 寝衣交換・体位交換 臥床患者の寝衣を交換し、左側臥位に体位を変えてください。	身体を動かすときに介助が必要な臥床患者。
	4. 移動・移送 仰臥位の患者を車椅子に移し、少し散歩した後、にベッドに戻してください。	身体を動かすときに介助が必要、歩行できず全身に力が入らない。
後 期 の 項 目	5. 全身清拭 臥床患者の上半身の石鹸清拭をしてください。	身体を動かすのに介助が必要、自分で拭けない。
	6. 部分浴 臥床患者に下半身の石鹸清拭と足浴をしてください。	身体を動かすのに介助を必要とし、下肢を支えてもらえない。
	7. 洗髪・結髪 臥床患者にケリーパードを用いて洗髪をしてください。	身体を動かすのに介助が必要。
	8. 導尿・尿器介助 臥床患者に尿器介助をし、その後導尿をしてください。	自然排尿はできるが残尿がある。 下肢を支えられる。 ※モデル人形を使用。
	9. グリセリン浣腸・便器介助 臥床患者にグリセリン浣腸後、床上での便器介助をしてください。	自力では身体を動かせない。 ※カテーテル挿入は、患者役学生の握り拳で行う。

Dが「ほとんどできなかった」の4段階評価とし、各段階の細則は設けなかった。

4. 研究方法

1) 対 象

平成8年度基礎看護技術Ⅱの実技テストを受けた1年生79名。

2) 分析方法

(1) 実技テストに使用した評価表の分析

評価表の妥当性を明らかにするために、榎田

他²⁾による「生活行動援助技術の構成要素」を参考に評価表を分析した。榎田他は生活行動援助技術を「技術の核となる要素」と、対象に適用する際にどの援助にも共通して欠かせない「共通不可欠要素」(「説明と了解」「環境の調整」「使用物品」「ボディーマニクス」「プライバシーの保護」)に構造化した。本研究では実技テストの9種目について「技術の核となる要素」を定義し、「共通不可欠要素」には「看護者の態度」という要素を加え評価表の項目を新たに分類し要素別構造表を作成した(表3、表4)。

表 2 評価表 (例 全身清拭)

学生番号

学生氏名

実技テスト項目「全身清拭」		合計点 点		合・否			
出題：臥床患者の上半身の石鹸清拭をしてください。		備考：記名（ ）					
患者の条件：身体を動かすのに介助が必要、自分で拭けない。							
区分	チエック項目	A	B	C	D		
準備	1. 必要物品を正確に準備した（タオル類、ベースン、石鹸、パウダー他）	5	4	3	2		
	2. 患者にわかりやすく説明し、了解を得た	5	4	3	2		
	3. 環境を整えた	5	4	3	2		
操作	1. 不必要な露出を避け、プライバシーの保護ができた	10	7	6	5		
	2. 湯の温度を適切に維持し（52℃以上）、きれいな湯で拭いた	10	7	6	5		
	3. 手ふき、ウォッシュクロスの使い方が適切だった	8	6	5	4		
	4. 身体各部（顔、上肢、胸腹部、背部等）の拭き方が適切だった	10	7	6	5		
	5. 石鹸分を十分拭き取り、乾燥させた	7	5	4	3		
	6. 背部のストローキングを適切に行った	5	4	3	2		
	7. 体位を安定させ、安楽に保った	5	4	3	2		
完成時	1. 上半身をもれなく拭き、汚れをとり、爽快感を与えた	5	4	3	2		
	2. 寝衣を整え、かけものを肩までおおった	5	4	3	2		
	3. 環境を整えた（附属品、カーテン、スリッパ等）	5	4	3	2		
態度	1. ベッドを保護し、無駄な動作が少なく合理的だった	5	4	3	2		
	2. 患者への接し方（声かけ、誠実さ、観察等）を心がけた	5	4	3	2		
	3. 身だしなみ（髪、爪、服装、靴、エプロン等）を整えて行った。	5	4	3	2		

(2) 実技テスト結果

実技テストの結果について Stat View を用い統計処理を行った。

5. 結 果

1) 評価表の日常生活の援助技術構成要素

表 4 に示した要素別構造表をみると、われわれの作成した評価表はほぼ各要素を含んでいたが、「共通不可欠要素」の一部に不足のある種目が明らかとなった。ベッドメイキングは他の種目と異なり患者役の設定はなく、「説明と了解」という要素を含んでいなかった。また、リネン交換、寝衣交換・体位交換、移動・移送、洗髪の 4 種目には「プライバシーの保護」という要素が、「技術の核となる要素」に含まれていたため、共通要素として分類できなかった。評価表の 16 項目の構成は、各「共通不可欠要素」が 1

から 2 項目ずつであり「技術の核となる要素」は 6 から 9 項目であった。点数配分から見ると「共通不可欠要素」が 4 割、「技術の核となる要素」が 6 割であった。

2) 実技テストの結果

技術テストは 79 名に 9 種目の技術テストから 2 種目を実施したため分析には 158 枚の評価表を使用した。

各種目を実施した対象者数はベッドメイキング 16 名、リネン交換 23 名、寝衣・体位交換 23 名、車椅子での移動・移送 17 名、上半身清拭 19 名、下半身清拭 14 名、洗髪 12 名、洗腸・便秘介助 15 名、導尿・尿器介助 19 名の計 158 名であった。

(1) 実技テストの結果

各種目別の結果を表 5 に示す。実技テストの

表3 各技術の目的と核となる要素

技 術 項 目	目 的	核 と な る 行 動
ベッドメイキング	・清潔で寝心地のよい病床を提供する。 ・機能的な病床環境にする。	・ベッドのゴミやシーツ類のしわを除去する。 ・体動が自由にでき、圧迫しない、かつ、くずれないベッドを作る。
リネン交換	・清潔で寝心地のよい病床を提供する。 ・機能的な病床環境にする。	・ベッドのゴミやシーツ類のしわを除去する。 ・体動が自由にでき、圧迫しない、かつ、くずれないベッドを作る。 ・ベッド周辺のゴミ類を除去し、整える。
寝衣・体位交換	・衣類・皮膚の清潔をはかる。 ・血液循環を促進させる。 ・爽快感を得る。 ・安楽な体位をとる。 ・安定した姿勢で移動する。	・清潔な寝衣に交換する。 ・身体的位置や向きを変える。
車椅子での移動・移送	・安楽な体位をとる。 ・安定した姿勢で移動する。	・身体的位置や向きを変える。 ・ベッドから他の場所へ移動する。
上半身清拭 下半身清拭 洗髪	・皮膚の清潔をはかる。 ・血液循環を促進させる。 ・爽快感を得る。	・適度な圧と適切な方向で拭く。 ・きれいな湯、適切な温度の湯を維持する。 ・石鹸分や水分を除去する。
導尿・尿器介助	・安心して老廃物を排泄できる。 ・健康な排泄習慣を維持する。 ・尿道から管を挿入して膀胱内の尿を排泄する。	・尿器を適切にあて、安定した体位をとる。 ・陰部臀部のスキンケアを行う。 ・尿道から管を挿入して膀胱内の尿を排泄する。 ・無菌操作を行う。
グリセリン浣腸・便器介助	・安心して老廃物を排泄できる。 ・健康な排泄習慣を維持する。 ・肛門から薬液を注入して腸壁を刺激し、腸の蠕動をおこさせ、排便を促す。	・便器を適切にあて、安定した体位をとる。 ・陰部臀部のスキンケアを行う。 ・肛門から薬液を注入して腸壁を刺激し、腸の蠕動運動をおこさせ、排便を促す。

結果、全対象者の平均得点は 75.26(SD=8.92)であった。9つの種目別の平均得点は、高得点の順にベッドメイキング 77.62 (SD=11.65), 寝衣・体位交換 77.35 (SD=7.87), 下半身清拭 76.14 (SD=11.45), 浣腸・便器介助 75.13(SD=5.67), 導尿・尿器介助 74.74(SD=9.40), 上半身清拭 74.68(SD=11.76), 車椅子での移動・移送 74.65 (SD=7.40), リネン交換 74.13 点 (SD=7.30), 洗髪 72.00 (SD=6.35)であった。

1回目と2回目のそれぞれの平均得点は、1回目 75.60 点 (SD=9.36), 2回目 74.92 点

(SD=8.51)であった。t検定による平均得点の差の検定では、統計的有意差は示されなかった($t=0.471$, $p=0.64$)。

(2) 紙上テストと実技テストの関係

日常生活援助技術の紙上テストと技術テストの関係は、相関係数を用いて分析を行った。紙上テストの結果は前期と後期の得点の平均得点を、実技テストの結果は2種目の平均得点を分析に用いた。その結果、 $r=0.298$ の弱い相関を示した。

(3) 評価者間の得点差

評価者が異なることによる得点への影響を分

表4 要素別構造表

A：説明と了解 B：環境の調整 C：使用物品 D：ボディーメカニクス E：ブラバシーの保護
F：看護者の態度，身だしなみ 核：核となる要素

	核	A	B	C	D	E	F
ベッドメイキング	9	0	2	1	2	0	1
リネン交換	7	1	3	1	2	0	2
寝衣・体位交換	8	1	2	1	1	1	2
移動・移送	9	1	2	1	1	0	2
上半身清拭	6	1	3	1	2	1	2
下半身清拭	7	1	3	1	1	1	2
洗髪	8	1	3	1	1	0	2
導尿・尿器介助	7	1	3	1	1	1	2
浣腸・便器介助	7	1	3	1	1	1	2

表5 実技テスト種目別結果

	例数	平均	標準偏差	最小値	最大値
ベッドメイキング	16	77.62	11.65	54	94
リネン交換	23	74.13	7.30	60	88
寝衣・体位交換	23	77.35	7.87	61	91
移動・移送	17	74.65	7.40	63	89
上半身清拭	19	74.68	11.76	56	96
下半身清拭	14	76.14	11.45	56	96
洗髪	12	72.00	6.35	59	80
浣腸・便器介助	15	75.13	5.67	65	85
導尿・尿器介助	19	74.74	9.40	62	89
全種目	158	75.26	8.92	54	96

析するために、評価を担当した4名の教師の平均得点の差を1元配置分散分析を用いて検定した。表6に示したように、各教師の平均得点には統計的有意差がみられた ($F=2.68$, $p<0.05$)。更に、多重比較分析を行った結果、 $p<0.05$ でA教師の平均得点は他の3教師よりも高く、各々統計的有意差を示していた。各教師の平均得点の差を詳細に分析するために、「技術の核となる要素」と7つの「共通要素」について一元配置分散分析を行った。その結果、「技術の核となる要素」では統計的有意差は示されず ($F=0.47$, $p=0.70$)、「説明と了解」 ($F=4.73$, $P<0.01$)、「環境の調整」 ($F=4.73$, $p<0.01$)、「使用物品」 ($F=5.40$, $p<0.01$) で統計的有意

差が示された。多重比較分析の結果、 $p<0.05$ で「環境の調整」、「使用物品」では、A教師が他の3教師の平均得点よりも有意に高く、「説明と了解」ではB教師が他の3教師よりも有意に低い平均得点を示していた。

(4) 9種目間の成績の差

種目の違いによる成績への影響を分析するため、各種目について4段階 (A=80~100点, B=70~79点, C=60~69点, D=59点以下) に評価された結果を比較した。各種目の成績は表7に示した。Kruskal-Wallis検定を用いて分析を行った結果、9種目間の成績に統計的有意差は示されなかった。

(5) 基礎技術を構成する各能力の分析

学生の持つ能力について分析するため、9種目別に技術テストの結果を「技術の核となる要素」と6つの「共通不可欠要素」に分け、すべての項目を1から4点に配点し、平均得点の比較分析を行った(図1)。尚、今回の技術テストでは、9種目にすべての構成要素が含まれていなかったため、統計的検定を行っていない。

9種目に共通して「使用物品」が高い得点を示し、「ボディーメカニクス」が低い得点を示していた。また、「プライバシーの保護」について寝衣・体位交換以外の項目では低い得点が示さ

表 6 評価者別得点結果

	A 教官	B 教官	C 教官	D 教官	F 値
合計得点	78.65±8.97 (n=40)	73.85±7.00 (n=39)	74.15±8.74 (n=39)	74.33±10.10 (n=40)	2.68*
技術の核	2.77±0.51 (n=40)	2.69±0.42 (n=39)	2.66±0.58 (n=39)	2.67± 0.64 (n=40)	0.34
説明と了解	3.15±0.89 (n=36)	2.77±0.87 (n=35)	3.38±0.58 (n=36)	3.27± 0.75 (n=35)	4.73**
環境の調整	3.19±0.73 (n=40)	2.94±0.70 (n=39)	2.62±0.80 (n=39)	2.65± 0.85 (n=40)	4.73**
使用物品	3.70±0.61 (n=40)	3.20±0.90 (n=39)	3.03±0.81 (n=39)	3.33± 0.86 (n=40)	5.04**
ボディーメカニクス	2.79±0.81 (n=40)	2.44±0.64 (n=39)	2.37±0.70 (n=39)	2.55± 0.78 (n=40)	2.44
プライバシーの保護	3.10±1.00 (n=21)	2.71±0.64 (n=21)	2.75±0.85 (n=24)	2.67± 1.13 (n=24)	0.96
看護者の態度	3.36±0.66 (n=40)	3.18±0.57 (n=39)	3.46±0.45 (n=39)	3.21± 0.70 (n=40)	1.87

*p<0.05, **p<0.01

表 7 種目別実技テスト成績

	人 (%) (n=158)			
	A	B	C	D
ベッドメイキング	7(43.75)	3(18.75)	5(31.25)	1(6.25)
リネン交換	7(30.44)	9(30.13)	7(30.44)	0(0)
寝衣・体位交換	8(34.78)	12(52.17)	3(13.04)	0(0)
移動・移送	4(23.53)	9(52.94)	4(23.53)	0(0)
上半身清拭	6(31.58)	6(31.58)	6(31.58)	1(5.26)
下半身清拭	6(42.86)	5(35.71)	1(7.14)	2(14.29)
洗髪	1(8.33)	8(66.67)	2(16.67)	1(8.33)
浣腸・便器介助	3(20.00)	10(66.67)	2(13.33)	0(0)
導尿・尿器介助	8(42.11)	4(21.05)	7(36.84)	0(0)

れていた。

「技術の核となる要素」と各「共通不可欠要素」について、1 回目と 2 回目の得点を別々に集計した結果を図 2 に示した。その結果、1 回目と 2 回目の平均得点に統計的有意差は示されなかった。

6. 考 察

1) 評価表及びテスト運営について

看護技術の修得状況の評価を行う場合、評価表の各項目には技術目標達成のための内容を含む必要がある。田島³⁾は「各看護技術には認知領域、情意領域、精神運動領域を含む。」と述べている。我々は認知領域については、紙上テストで別に行い、実技で使用する評価表を情意領域と精神運動領域に限定した。紙上テストと実技テストの相関性は弱く、必ずしも認知レベルが技術実践力と直結しているわけではなかった。細部の関係について分析していないので検討の余地は残されている。

9 種目の評価表を我々が作成した要素別構造表(表 4)により検討した結果、「核となる要素」に分類された項目が点数配分では 6 割を占め、「共通不可欠要素」は 4 割であった。この結果は技術の中心となる要素を重視して評価表を構成

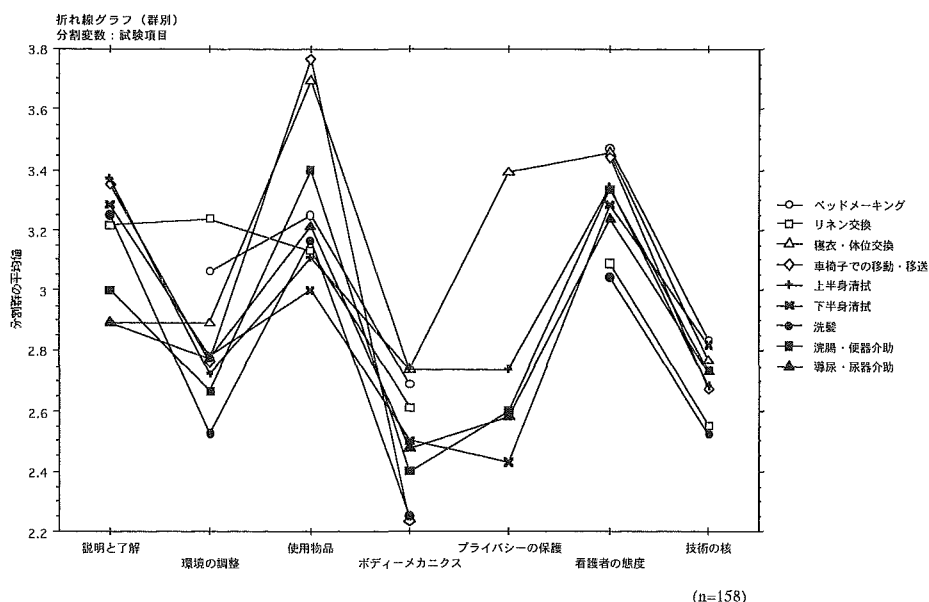


図1 日常生活の援助技術の構成要素別平均得点

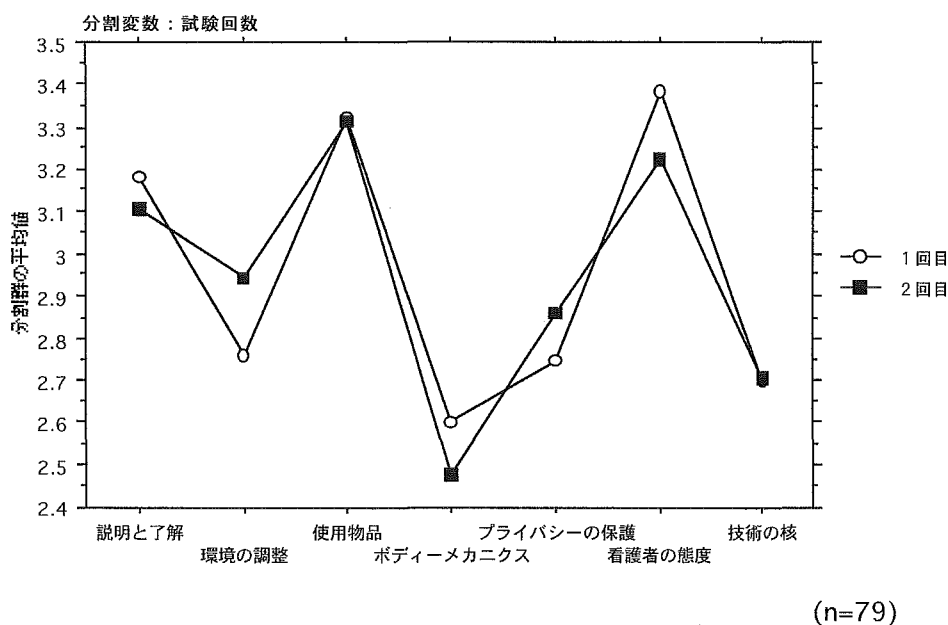


図2 回数別日常生活の援助技術の構成要素別平均得点

したことになる、これは我々の実技テストで技術の原理原則を重用したねらいを反映しており妥当だったと言える。

一方、技術の対象となる患者役が存在しない

ために「説明と了解」や「プライバシーの保護」などの「共通不可欠要素」が不足していたベッドメイキングをテスト種目に含めたのは、これが看護技術の基本的構造をもつものとして重要

視されているからである。しかし、今回の検討によって、患者の有無は共通要素の一つとして考慮すべき課題であるとわかった。「共通不可欠要素」の一部が不足していた他の種目を含め、「技術の核となる要素」以外の共通要素を一律に含めきれなかった評価表の項目については再検討が必要である。

各教師が評価した実技テストの平均得点には統計的有意差がみられた。この差が生じた原因を評価表から以下のように考察した。評価表は異なる種目をテストされる学生間の差異を少なくするために、項目数は9種目とも同じ数とし、限定時間内で評価するために16項目にとどめた。しかし、このことは1項目に2種類以上の内容を含ませる結果となった。たとえば、ベッドメイキングの操作6「枕は空気を入れ、カバーをきれいにかけ、置き方は考えられた」という項目は、枕に空気入れるとカバーをきれいかけると枕の置き方という3種類の内容を含み、各教師がどこに注目するかによって、評価に差が出てくる可能性があった。

また、評価表の項目には「適切な」という抽象的な表現が含まれ、教師間の解釈に幅が生じる可能性があった。しかし、看護行為は人間を相手にするものであり、その時々状況に合わせて変容させる手法を駆使しながら目標を達成させる複雑な内容をもつものである。技術目標達成の手順は幾通りもあり、技術テストでは一つの手順に限定しないで、学生の創意工夫を尊重し、達成される事項で評価したいという意図が抽象的な表現につながったと思われる。

Sachs 他⁴⁾は「評定が信頼性と妥当性をもち、行動の特質を適切に示すためには、それらの要素を全て明確に示し、評定尺度を利用する全ての人に理解してもらう必要がある」と述べており、テストとしての行動レベルの表現はより明確にされる必要があったと考える。今後、含有する幅をもたせた表現については慎重に再考したい。

Sachs 他⁵⁾は複数の評価者が評価することについて「直接観察は主観的な手法であるが、出来るだけ客観的に行うことが大切であり、その技能や特徴にどのようなものが含まれているかを教師全員で討議すべきであり、それを明確に規定した評価表を作成しておくこと」と述べている。我々は「基礎看護技術Ⅱ」の後期には、学生を15グループに分け、5名の教師がそれぞれ3グループを指導して学内実習を強化した。学内実習の運営では、教師ミーティングを設け、各技術の原理原則を確認した上で、デモンストラーション内容、物品の準備、留意点などを意見交換し共通の理解で学生を指導した。このことにより、それぞれの教師の看護観や技術観、教育観などに関する重点のおきかたの差が縮まり、「技術の核となる要素」については、教師間の平均得点の統計的有意差が見られず、一定の水準での評価を可能にしたと考える。しかし、ミーティングは技術の原理原則に重点をおいたために「共通不可欠要素」では教師間の評価に統計的有意差が生じたとも考えられる。「共通不可欠要素」についても教師間の理解を縮める努力が必要である。

2) 学生の学習特性

技術テストを実施した9種目の技術の平均得点間に統計的有意差は示されなかったが、最も得点の高い「ベッドメイキング」と最も低い「洗髪」では平均得点に5点の差がみられた。「洗髪」の実践では、ケリーパードと頭の配置、頭の振動の抑え、耳や首を保護した濯ぎ動作に苦勞する様子があった。これらの動作は、対象となる患者によってその人の体格や髪分量にあわせた配慮を必要とし、学生が「洗髪」で教師のねらいに達するためには、繰り返しの練習が必要である。村上⁶⁾は「洗髪は自己評価がしにくく練習回数も少ない」と述べ「援助方法を創意工夫する必要がある条件は学生の思考を促すが、必ずしも練習を促進させるとは言えない」「必要物

品が多く、準備・後始末が煩雑であることは練習を妨げる因子」とあげている。技術テストの際には、学生の練習時間が充分とれるように配慮をしたが、他の技術に比べ、多くの物品を準備し、実際に髪を濡らし時間を要する練習相手の確保も行わなければならない洗髪は繰り返しの練習が困難であった。成績の結果からみると、Dレベルの学生数は他の種目と大きな違いはないが、Aレベルの学生はたった1人であり、他の技術種目に比して少なく、技術の上達が難しかったことから、より練習が必要である種目と思われる。

このように難度の高い技術と考えられる洗髪も他の種目と同じ15分間でテストを実施した。この結果学生は15分で洗髪を終了するために素早い行動をとらなければならない、焦りや中途半端な動作のために減点されていた。時間制限がない場合には、学生は慎重に洗髪を実施し減点を減らすことが出来たと思われる。よって、テストを実施するにあたり、教師がねらいとする達成度をみるには、時間を重視するのか、技術の確実性を重視するのか検討したうえで、一つひとつの技術評価の時間や課題内容を設定することが必要である。

高い平均得点を示したベッドメイキングは、対象の状態にあわせて技術を工夫する必要はなく、決まった手順を繰り返し練習することにより、上達することが可能であった。よって、ベッドメイキングと洗髪の評価結果からみると、相手の状態にあわせて技術を工夫し、繰り返しの練習が困難な技術ほど、学内実習では上達が遅れると言えよう。

基礎技術を構成する能力の要素では「ボディーメカニクス」が全ての技術に共通して低い得点を示した。マニュアルをみれば修得できる「使用物品」「環境の調整」などの要素と、実際の体験を積み重ねることで確実に修得しなければならない「ボディーメカニクス」という要素には学習プロセス上の違いがあると考えられる。

7. 結 論

1. 評価表を日常生活の援助技術構成要素別に見ると、各「共通不可欠要素」と「技術の核となる要素」はほぼ含まれ、その割合は4:6であった。実技テストの重点は「技術の核となる要素」にあったことから評価表として妥当な構成であったと言える。
2. 評価表のチェック項目に複数の内容を含む表現や「適切に」などの解釈に幅をもつ表現があり、行動評価として再考を要するものがあつた。
3. 評価者間の平均得点の差は、統一見解を得られるように事前に調整した「技術の核となる要素」には見られず、各人の裁量に任された「共通不可欠要素」に認められた。
4. 学生の学習特性として種目別には、決まった手順を繰り返し練習することにより上達する「ベッドメイキング」の得点は高く、技術が複雑で時間を要し、練習しにくい「洗髪」は低かった。要素別では、実際の体験を積み重ねることで確実に修得しなければならない「ボディーメカニクス」が低かった。

8. おわりに

今回の研究目的である、援助技術の評価方法としての妥当性については、評価表の項目構成や、各学生に割り当てられた種目の違いによる得点への影響、各学生が2回テストを受けることによる影響は示されず、適切であったと考えられる。しかし、結論に述べたように、評価表の項目の表現や評価者の認識の統一の点で問題が残された。また、学生の学習特性については、技術テストの結果から、学生の修得困難な種目や、技術要素が明らかになった。

看護技術の目標達成にあたっては、的確で早い動きが重要であると考えられる。学生はその実現に向けて、意欲的に練習に励み、充実感や満足感を得て実技テストを終えた様である。課題

は残されているが、基礎看護技術の一テスト形態として挑戦する意味はあったと思いたい。

引用・参考文献

- 1) 氏家幸子：基礎看護技術 I，p.222，1997，医学書院，東京。
- 2) 榎田守子他：看護技術の原理と適用に関する研究(2)，神戸市看護大学短期大学部紀要，Vol. 15，p.37～47，1996。
- 3) 田島佳子：看護教育評価の基礎と実際，p.85，1989，医学書院，東京。
- 4) Lorraine P. Sachs 他：近藤潤子監訳，看護教育における評価，p.89，1982，医学書院，東京。
- 5) 前掲書 4)，p.23
- 6) 村上みち子他：基礎看護技術の実技試験における自己学習に影響を与える因子，順天堂医療技術短期大学紀要，6 巻，p.2～13，1995。
- 7) 近藤潤子訳：看護教育における評価，医学書院，1982。
- 8) 鈴木淳子他：自己評価視点の提示が看護学生の技術練習に及ぼす影響，順天堂医療技術短期大学紀要，4 巻，p.17～26，1996。
- 9) 門脇豊子：看護法令要覧平成 9 年度版，日本看護協会出版会，1997。